
デッド・アイランド

罪人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デッド・アイランド

【Nコード】

N7482Z

【作者名】

罪人A

【あらすじ】

罪人よ。

己の罪を流したくば、死を乗り越えてみせろ。この地獄の世界から人間として行きたくば、最低の行動をし、泥水を啜ってでも生きながらえてみせろ。

さすれば、罪も流れるだろう。

死者で埋められた島で罪人は凄惨過酷の旅をして、生き残れるのか・
・・？

死者の住処

俺は気づけば、何処かの屋上にいた。

眠る前までは、豚箱の様な養豚場のような刑務所に入っていた。クソ不味い飯を喰らって、生き続け更生の為に汗水垂らして仕事をし、豚箱眠る、人間として最低限の生活で生きていた。

いつものように眠りについて、そして起きればこのざまだった。晴天の空が眩しい。ゆっくりと体を起こして、まず周囲と俺自身をチェックした。

屋上。ドアは一つ。金網が張り巡らされて落下防止。自分の服装は灰色の上下の服。これは刑務所内とは変化なし。変化があるのはやはり場所のようだった。

髪をなびく程度に吹いた風が心地よい。立ち上がった。今度はビル以外。つまりここから見える景色の状況だ。

ボロボロの靴でビルの屋上を歩いて、金網の前まで来て外の景色を眺めた。

ーすると、

「なんだ・・・これは・・・」

火の気が立ち上り、静けさの街並みの中に人と同じような化物がゾロゾロと道路をゆらゆらと体を揺らしながら、歩いていた。これは、見たことがある。見たことがあるって言うっても、映画などで良く目に掛ける空想状の存在としてだ。そう、一瞬で見て、思いついた言

葉は、

「ーゾンビだ」

いきなりの状況の変化で戸惑いながらも金網から離れた。

本当にあれはゾンビか？これは何かの夢か？俺の頭は完全にパニックを起こしていた。

仮装パーティーか何かじゃないのか？

「誰か、助けてくれえええ！！」

その時、叫び声が木霊した。すぐに声の方角へと視線を向けると、俺と同じような服装のヒゲを生やした40代くらいの男が目の中のビルで金網をガンガンと引きちぎろうとしている。

一体、どうしたんだ？と視線を向けて、その男の周囲を睨んだ。こっちに気づいた男が俺を見ながら助けてくれ助けてくれ！！と怒鳴るように懇願している。

流石にこのビルを降りて、あっちまで行くことはかなり時間が掛かる。それにどうしてそんなに怯えているのか理解できない。

「どうしたんだッ？」

と男に聞こえるくらいの大きさの声で男に聞くと男は怯えながらも背後を気にしつつ答えた。

「化物だ！化物に襲われてるんだッ！！」

「化物・・・？」

とその時、男の声が更に大きくなり、それは悲鳴となった。

「うわぁー！ツ！！？来た、来た・・・来るなツ！助けてくれツ！！」

俺から視線を外して、背後の何かに怯える男は金網に張り付くように引っ付いて、体を小刻みに震わせている。

「助けてくれ助けてくれ！！ヤメロー！ツ！！」
「ッ！？」

その時、丁度男を抱きつくように現れた者が見えた。体中が腐り果て、目は白濁でうつろとして、尚人間を噛み付いたローゾンビだ。

「あがぁ！！たすけ・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と視界から消えた男の断末魔が響く。それは人間の悲鳴とは思えない程、凄惨な声で俺は立ち尽くすしかなかった。金網に男の物である血が吹き出すように金網に付着する。水分を含んだぐちゃぐちゃという音が響き、ウゴオなどのまるで赤子のような低い声が響く。

思わずたじろいで、後ずさりをし、躓いて転んでしまう。

意味がわからねえ、人が死んだ？なんだあれ？見たことないぞッ！！どうすればいい？

ゾクツと背筋を凍るような感覚に襲われて、すぐにドアに振り返った。なんとも変化のないドアを見つめ、安心と共に先程の状況が思ひ出される。

逃げないと、ここから！！安全な場所に！！

俺はすぐさま立ち上がって、ドアに向かって走った。ドアノブを握

って開くとそこは階段だった。中間ほどで折り返しの階段。階段から身を乗り出して下の状況を見るとゆっくりと階段を降りた。

屋上と違ってポカポカとした陽気な温かさは無く、階段のかつんという音と体内にまで響くほどの冷たさがあるのみだった。

中間まで降りるとそこから下の様子を伺う。悲鳴もゾンビの声も聞こえない。聞こえるのは自分の足音と耳鳴りだけ。

大丈夫だ。落ち着け、どうすればいい？これからの行動だ。取り敢えずこのビルの内部で安全な場所に移動して、いや、それより先に武器だ。何か武器になるものがある。

階段を音を経てないように降りて、降りた階のフロアについて周囲を見渡す。

どうやら何処かのオフィスのようだ。デスクトップのパソコンがずらっと並び、武器になるものが見つからない。ペン立てに入ったボールペン。武器になるか？いや、ならないだろう。パソコン自体を武器に出来るか？出来るかもしれない。ゆっくりと周囲を気にしつつ、一番手前にあったパソコンを掴んだ。が、色々なケーブルに繋がれて、取れなかった。俺は素早くケーブルを驚掴みにして引き抜いて、パソコンのモニターを持った。

ここは視界が良くで逃げる場所がない。ここに隠れるのはよくない。場所を変えよう。

大丈夫だ。武器を持ってる。一人くらいなら相手に出来る。下の階に行ってみよう。

パソコンのモニターを掴んだまま、階段へと向かった。

階段から身を乗り出して、下の階の状況をあらかじめ把握して、中間まで降りる。そして、中間から耳を済ませて、ゾンビがいるか確認してから階段をゆっくりと降りる。

そもそもここは何階建てなのか、屋上で調べておけばよかった。予想としてせいぜい4階くらいだと思うが、ならここは2階か。2階には何が・・・？と調べると2階も同じようなオフィスだった。

ふうつとため息をついて近くにあった机にモニターを置いた時、異変があった。

一番奥の机がガタンと揺れた。なんだッ！？ゾンビかッ！！マンガや映画のようなゾンビは、わかりやすいものだが現実では違いはわからない。もしかしたら、隠れている可能性もある。

モニターを掴んで、息を整えてゆっくりとその場所に向かう。大丈夫だ、脳天を狙えば、一撃でも倒せるだろう。行くぞ、1・・・2・・・3ッ！！

身を乗り出すとモニターを降り下ろそうとした手を止めた。寸前で気づいたそこにはビクビクとしている女の子がいた。涙目の女の子は体を強ばらせ、目を瞑っている。

「・・・おい、」

「ひッ!？」

「大丈夫だ、俺は人間だ」

「・・・あ」

女の子は俺の顔を見ると安心して、目から涙を漏らして、俺に抱きついてきた。

「うわあああん、怖かったー」

「ちょッ!?抱きつくな!!」

「うわああああん」

号泣する女の子に溜息を吐いて、モニターを下ろした。ふっと視線を階段へと向けると、安心した感情を捨てる光景だった。階段からゾンビが一人階段をゆっくりと上がってきたのだ。

低いトーンで赤子のようにうめき声を上げるゾンビがゆらゆらと体を揺らして、この階に上がってきた。

「おい、俺の後ろに隠れろ」

「・・・え?」

呆気にとられている女の子を強引に俺の後ろに下がらせるとモニターを強く握った。

これで殺せるか?いや、無理かもしれない。もっと有効的な武器は・・・?と周囲をくまなく探すも、あるのは机と椅子だけ。この階にはパソコンが一台も設置されていなかった。

「おい、机の中を調べて何か武器になりそうなものはないか?」

「・・・う、うん!!」

女の子が机の引き出しを開けて武器になりそうなものを探している、俺はゾンビから視線を外さず、行動を見る。体を揺らしながら、徐々に近づいてくるゾンビに鼓動が答えるように早くなっていく。

「だめだよッ!!何もないよ!!」

「・・・こそ、」

どうする。大丈夫。これで殺せる。落ち着け落ち着け俺。相手はな

んでもないただの人だ。

「ウゴオーー」

もうすぐそこまで来ている。覚悟を決めるこのままだと屋上の男と同じ目に会う。行ける行ける！！行くぞッ！！

「オラぁー！！！！ッ！！」

モニターを両手に抱えて、ゾンビの頭部目掛けて振り下ろす。ゾンビは俺を掴もうと両手を伸ばすがそれより先に頭部にモニターを振り下ろした。ガンッ！という鈍い音が響き、地面に叩きつけたゾンビに追撃で東部にモニターを振り下ろす。何度も、モニターの液晶が壊れてもそのまま落とし続ける。

ぴくりとも動かなくなったゾンビに最後の全力で振り下ろすと、少し後ずさった。

「ハア・・・ハアハア、やったか・・・？」

尻餅をついて、目の前のゾンビを見つめる。予想以上に息が上がっている。が、ゾンビは一匹だけではなかった。階段からゾロゾロとゾンビが姿を現している。

「あ、あの、ゾンビがッ！？」

「わかってる！」

どうすればいい？上に上がる階段はゾンビ達が上がってくる階段の横だ。そこまで行けるか？絶対に無理だ。ここは何階だ？2階だ。飛び降りれるか？

起き上がると窓を開けて外を見た。

かなり高いが、死ぬような高さじゃない。いや、外に何かの天井がある。2メートルほどの高さだ。あそこに飛び降りれば、まだ無事だ。

「おい、飛び降りるぞ！」

「えっ！？無理だよ！」

「大丈夫だ。あそこの天井に飛び乗れば、怪我もしない」

「い、いやだよ！高いのは怖いんだもん！！」

「文句を言っなこのままだとゾンビの餌食だぞ！！」

「う・・・」

女の子は天井と迫り来るゾンビを交互に見つけて、一気に窓から飛び降りた。

よし、よし、俺も続くように窓から屋上に飛び降りた。ガンと天井に飛び降りると、すぐに行ける場所は？目の前のビルか？男が食われたビルが逆方向だから安全の可能性がある。

「目の前のビルに入るぞ」

「う、うん」

天井とつながった窓に手をかけるとそこには運よく鍵がかかっていなかった。素早く開けて中に入る。

こんなくそ世界にいきなり連れてきやがって、見てろ！！意地でも生きてやる！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482z/>

デッド・アイランド

2011年12月24日19時54分発行